ヒトはなぜ自由選択場面を好むのか

— 選択可能性の観点から —

○堀麻佑子¹・嶋崎恒雄²(¹関西学院大学大学院文学研究科・²関西学院大学文学部)

キーワード: 選択行動, 並立連鎖スケジュール, 強制選択と自由選択

Why humans prefer free-choice: From the viewpoint of choosability

Mayuko HORI¹ and Tsuneo SHIMAZAKI²(¹Graduate School of Humanities, Kwansei Gakuin University, ²School of Humanities, Kwansei Gakuin University)

Key words: choice behavior, concurrent-chains schedule, forced-choice and free-choice

実験的行動分析の一領域として, 複数の選択肢から構成された選択場面間の選択についての検討が行われている. 選択場面間の選択事態では主に, 選択肢が一つしか提示されない強制選択場面と, 選択肢が複数提示される自由選択場面間の選好について実証的な検討がなされてきた (Catania, 1975, 1980; Suzuki, 1997; Voss & Homzie, 1970).

たとえば, 堀・嶋崎 (2009) はヒトを対象として強制選択場面と自由選択場面間の選好の検討を行った. その結果, 両選択場面を構成する選択肢に全て同一の結果が随伴する条件では, 自由選択場面に対する選好がみられた. さらに, 自由選択場面に含まれる選択肢の数を2つから3つに増やしても, 自由選択場面に対する選好がみられた. しかし, 両者の自由選択場面選択率に顕著な差はみられなかった. この結果から, 自由選択場面への選好を規定する要因が, 「選択肢の提示数」だけではないことが示唆された.

このように, 自由選択場面が選好されるという事実が, ヒトを対象とした研究では一貫してみられてきた (堀・嶋崎, 印刷中, Suzuki, 1997). しかし, なぜ自由選択場面が選好されるのかという問題については, 未だ明らかにされていない.

本研究の目的は強制選択場面と自由選択場面との相違点の一つである「選択可能性 (choosability)」に着目し, 終環における選択の可否が, 自由選択場面に対する選好に関与しているか否かを明らかにすることであった. 本研究では, 選択可能性があることを実験参加者が終環においてカードを選択できることとして定義した. また, 選択可能性がないことを実験参加者が終環においてカードを選択できないこととして定義した. なお, 選択可能性がない場合, カードの選択はコンピューターによって自動的に行われた.

方法

[実験参加者] 大学生 18 名 (男性 9 名, 女性 9 名). 平均年齢は 20.5 歳 (19 歳から 22 歳).

[実験課題] 実験課題は並立連鎖スケジュールによって制御された. PC 上に提示された色つきカードを選択肢として設定され, 実験参加者は選択肢をクリックすることによって選択を求められた. 初環において, 実験参加者は選択不可能場面 (2A-UC 場面) か, 選択可能場面 (2A-C 場面) かの選択場面間の選択を求められた. 終環では, 2 枚のカードが提示された.

2A-UC 場面では, コンピューターがカードを選択し, 2A-C 場面では, 実験参加者はカードの選択を求められた. どちらの場面でも, 選択されたカードの上部には矢印が提示され, 選択されなかったカードは灰色に色が変わった. また, 2A-UC 場面で選択されるカードは, 獲得するポイントが最大のカードが必ず選択された. 最終的に 40% の確率でポイントが提示された. 終環で提示されるそれぞれのカードは, 色によって与えられるポイントが弁別可能であった (Table 1). また, 堀・嶋崎 (2009) において設定された条件と同様に, Irrational 条件, Equal 条件, Rational 条件の 3 条件が設定された.

[手続き] 実験参加者は実験課題の開始前に, 実験課題の主旨はなるべく多くのポイントを稼ぐことであり, 実験終了後は 5 ポイント 1 円で換金されることを教示された. 初環からポイントの提示までを 1 試行とした. 1 条件ごとに 40 試行を行い, 3 条件が終了した時点で実験課題が終了した. 条件の提示順序は実験参加者間で平衡した.

結果および考察

Figure 1 は各条件における平均 2A-C 場面選択率を示している. Figure 1 から明らかなように, Irrational 条件, Equal 条件, Rational 条件の 3 条件において 2A-C 場面への選好がみられた. これらの結果から, 本研究で用いた実験課題において 2A-C 場面に対する選好がみられたことが示された. また, Irrational 条件と Rational 条件においては, 2A-UC 場面を選択すれば, 獲得できるポイントが最大になるように選択肢が選択されるにも関わらず, 実験参加者は 2A-C 場面を選択していることが示された. 本研究の結果から, 選択可能性は自由選択場面への選好に関与していることが示された. 今後は, 選択可能性がある場面と, ない場面における選択肢の提示数の効果について検討を行う必要がある.

Table 1
Experimental Design

Condition	Terminal Link			
	2A-UC		2A-C	
Irrational	G (10)	B (5)	G (10)	B (5)
Equal	G (10)	G (10)	G (10)	G (10)
Rational	G (10)	R (15)	G (10)	R (15)

Note. The letters represent the color of the cards: G, B, and R indicate green, blue, and red cards respectively. Numerals in parentheses represent the number of points assigned for each of cards.

Figure 1. Preference for 2A-C situation in the three conditions. Preference was calculated by dividing the number of 2A-C choices by total number of choices in the IL and multiplying by 100. The broken line represents chance level. Error bars represent the standard error of the mean.

引用文献

- 堀麻佑子・嶋崎恒雄 (2009). 自由選択場面選好における選択肢の数の効果. 日本行動分析学会第 27 回年次大会発表論文集, 99.
- Suzuki S., (1997). Effects of number of alternatives on choice in humans. *Behavioural Processes*, 39, 205-214.